ラアララギ

2022年 令和4年1月 睦月

新 年 号

第六十九巻 第一号



ニューヨーク日記(183) http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

JAPANESE CAVIAR

Blue Shoe Diaries



ファンシーなお寿司屋さんで日本のキャビア食べたら出汁で味付けしてあってとて も和な味に!美味しかったよ!やっぱり日本食、日本の味が1番。コロナ禍の中 家族だけの貸切で贅沢したぞ。

I had Japanese caviar for the first time. Rather than going for a fusion cuisine approach, this one was brined in dashi, giving it a subtle but very Japanese flavor. I think I like it! Especially when handled by a sushi chef at one of my favorite sushi restaurants.

4																								
					『ことよせ』 いーはとぶ	子規庵	耀やきて	皆既月蝕	引馬野	散り紅葉	雲の向かふに	きらめき	見守りくるる	チャレンジ	銀杏	母を恋しと	ありのままに	三河アララギ歌集	歌集「續々草々」	三河アララギ歌集	アカンサスの徑	ニューヨーク日記(83)	表紙・とら	
	森	牧原	吉見	鈴木羊	とぶ	夏目	山口五	杉浦東	白井	森岡	矢崎	伊藤	清澤	安藤	今泉	弓谷	岡本八	近藤	今泉	渥美	御津	Blue	今泉	目
	厚子(正枝(幸子(鈴木美耶子(勝弘(口千惠子(恵美子(信昭(陽子(直人(忠男(範子(和代(由利(久子(岡本八千代(泰子(米子(房雄(磯夫(Shoe (由利(1	次
	24	24	24	24		22	21	20	19	18	17 <u></u>	16	15 <u></u>	14 <u></u>	12	10	8	7	6	5	4	2	<u>1</u>	
					俳句』	童謡『花が咲いてる』	贈呈誌										現代学生百人一首							第六十九卷第一号(通卷八一七号)
	山光	森岡	松本	浜田	重野	高橋	森岡	中村	岩城	藤内	石川	渕	田中	高嶋	中	藤田	東洋大学	稲吉	牧原	水野	三三	伊藤	山﨑	一号
	正規(33)	陽子(33)	周二(32)	紀政(32)	善惠(32)	育郎(30)	陽子(28)	蕉 27)	吉紀 (27)	歩 27)	胡桃(27)	凌万(27)	曖菜(26)	優香(26)	一 平 26)	陸 26)	子	友江(25)	規惠(25)	絹子(25)	美奈子(25)	晴江(25)	俊子(24)	(通巻八
	「三河アララギ」について	『カーニバルのお面』	アルゼンチンつれづれ	編集室だより	「氷魚」のことから(252)	『新しく三河アララギ』	ことのはスケッチ 30	望郷	新春に作有り	年輪	初狩便り2	「江上浩二の独り言」		本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬	絹の話(134)	楽しい時間(110)	『酔いの徒然』(117)	かさね吟行会						一七号)
	٠,		14	今泉	岡本八千代	今泉	3 7 1	今泉	殿山	中屋	花野み	江上	本田	先生の春	今泉	山本紀	丸山酔宵子	濱田	今泉	矢崎	今泉	植村	木村	
	$\overline{}$	$\overline{}$		由利($\overline{}$	由利(由利(木風(保之(花野みぷり(浩二(勇気(夏秋冬	雅勝(山本紀久雄(紀政(由利(直人(如雲(公女(歩歩(
	$\overset{60}{\smile}$	59 <u></u>		58 <u></u>	57 <u></u>	$\overset{56}{\smile}$		54 <u></u>	52 <u></u>	$\overset{50}{\smile}$	48	46 <u> </u>	44 <u></u>		42 <u> </u>	40 <u></u>	38 <u> </u>	36	$\overset{35}{\smile}$	$\overset{35}{\smile}$	34	34	34 <u></u>	

アカンサスの徑

津 磯 夫

御

葉がくりに十年の花われにあり南青山の皐蘆はいかに

式典にゆけずこもりてかがやける黄金白銀の盃をたまはる

机 われをはばむやぶ肉桂の下枝のしげりも伐りてとほらむとする の上に供物惜しみて秋の日の久我龍膽はいはほのごとし

人の名もものの名もみな忘れがち山茶花はちる日蔭の石に

植ゑし年おぼえぬまでにはるかにて鉢にあふるる金龍邊は 朝々にたどる裏庭に白き茸あやふく踏まむひとところあり

来む年の花をのぞめばこの秋の花のさかりの根を植うるべし

己が木のいく本もあり成り年の熟柿啜らずひよどりつつく

鳴く蟲のひとつのこりて夜一夜一つの聲は一つところより

三河アララギ歌集

美 房 雄

渥

車窓の左ほのじろく見ゆるはオホーツク海か遠々に来て吾は賭にけり

草枯れし丘たひらかに海をかぎり凹地を占めて人家群れたり

うつそみの口より抜かれし大臼歯ふたつに割れてわが前にあり

ゆくりなくけふ往き還る跨線橋うしなひし時を呼ばぬ術なく

百合の花活けたる部屋に一夜寝き眠れる間も百合は匂ひて

夏ごとに足に水むし出るならひ運に受けきて今に遺れる

対外倍賞の支拂終れば税金もいくらか減らむかああ二十年先

資本主義あと十五年はもつとありわが残年といづれか長き

理想社会のヴィジョンまぶゆく描けると幻滅報ずるといづれ信ぜむ

歌集 「續々草々」

泉米子

大き家に古りて残りて家の中アンデス毛織の襟巻をする

度もわれは種蒔せぬままに凍てし土より茁づるものよ

文明の歌集に魚の名ありきこれぞこれこそ馬面皮剥

天津日の光洽ねし土未だ萌え来るものの静まりてあり

遠く来し人を見送る庭の徑むらがり尖る貝母のみどり ひまひまに出でゆく翁の木鋏に黒竹ならび笹立つところ

言ふこともなくて居りたるこの夕べ日脚伸びしと共にいひいづ

霜やけし土筆見つけぬ風花の舞ふ裏庭のきそけいの下

蒔かず植えず稚き万両群れてをりわれにたのしき庭の隅々

折々に「方竹の蔭にて」の頁繰り津軽こぎんの栞をはさむ

三河アララギ歌集

藤泰子

近

黄昏るるたまゆらにして冴々とたくましき陰を作る山襞

花祭りを見るのみならず火を焚きて酒呑み踊る鬼の如くに

うす暗き山の湯船にわが肌の美しく見ゆ夜更ひとりに

椎茸の崔木焼の芯にせむ根芹を探す石垣の陰

枯れ落ちざる葉をつけしまま万作の黄金の花を手渡されたり

点心の嫁菜御飯のひと口に人それぞれの春の香を言ふ 人間万事といふ香合はにくきかな午年初釜の席に手にする

葉を抜きて花のかたちのあらはれぬ君影草とその名つぶやく

睡蓮の花開くさまを眺めゐて子を起すべきこと打ち忘れたる

鶴首に宗旦槿の花を挿すただ一日の命の気品

ありのままに

蒲郡 岡本八千代

今日もまたありのままなる私にて活してゆくのよありがたきかな

昨日も今日も昼に近きに佛前にお佛供さまをお供へしたり

何としてもどこかで己を甘やかしぼつぼつとしてふらふらとしつつ

朝餉をば早くにすませしこと忘れ何かがまたも欲しくなりつつぁ゙゙゙゙゙゙゚

やうやうに北窓開けて風通すどうやら今日は晴れとなるかな

第二次の内閣大凡に顔ぶれを新聞紙上にて確めておく

手拭いを姉さんかむりに今日もかむり家の中にひたすら居るかな

部屋の中を涼しくしつつ鉛筆にて反古紙の裏に思ひつきを書く

わが大き丸テーブルを前にして今日は浮かび来短歌らしきことばよ

鉛筆を持ちさへすれば次々と浮かび来るかな短歌らしきことばよ

今朝もまたわが髪の毛の抜け毛光るぎんぎんと私のぎんぎん

板の間の長き廊下に光るかなわが髪のぎんぎんこのぎんぎんよ

ああ早くも電気釜の湯気あがる一日の暮しの白き湯気よ 今今を静かに燃えて活きてゆく老いぼれわれの口ずさみの歌

この頃は夢の中にも吾を産みし母が出てくる泣けてくるかな

母を恋しと

豊 Ш 弓 谷

好きだった句の幾つかが心をよぎる秋空深し今日は一茶忌

「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」小学校にて覚えし一句

苦と悲しみのひと世なりしか「露の世は露のながらさりながら」

隣家より金山寺味噌を頂きぬ母の手作りの味に似てをり

母の年十年越えたり今も尚母を恋しと思ふ日のあり

裏庭に小菊の花の咲き盛る小春日和の日の続きをり

三色すみれと昔は呼びたりパンジーとビオラの苗を子は買ひて来る

とりどりの色楽しまむパンジーとビオラプランターに並べ植えたり

紅葉の香嵐渓をテレビは写す家族旅行のあの日を憶ふ

朝より待ちゐし今宵の月食はおぼろおぼろのうす雲の中

子の指す方に目をこらしたりかすかに見ゆるこれが今夜の月食の月

平穏の日の続きゐて流感の予防注射を今日は受けたり

裏庭に穴を掘りたり貰いたるさつき二本を植え置かむ

明日の仕事思いつつ眠らむはやばやと電気毛布にくるまりて

足早に霜月逝きぬ冬型の気圧配置の迫り来るらし

銀

杏

京 泉 由

利

東

日本を知りたく歩む山の辺に二尊院あり知りはじめむを

此岸より「発遺の釈迦」彼岸へは「来迎の弥陀」遺迎ニ尊の二尊院

荘厳と長寿と鎮魂のギンクゴ・ビロベは公孫樹とぞ

平安の世に日本へ伝はりぬイチョウ科イチョウ属イチョウ

| 尊院の古代思ほふ銀杏を今朝も炒りをり10粒のほど 億年前に栄へしと公孫樹氷河期凌ぎて今日の銀杏

小粒にて濃き濃き緑の銀杏は太古の味と勝手に決める

マプサウルス・パタゴニクス・アウカマウェボ銀杏朝食大騒動

最初から最後までを意味すると阿吽の途中私の命

五日ほど留守にする故残りゐる食材集めてピザ出来上る

羽田より航空マップの一本線その上飛んで奄美大島

限りなく奄美の自然に混じり入る太古のことよ今吹く風よ

車輪梅 の濃き緑の葉の中に幾枚混じる赤葉の不思議

絹蛋白と車輪梅タンニンと泥田の鉄分子奄美大島泥染紀行

目に見えぬ黴菌地球を被ひいて静かに過す静かに眠る

チャレンジ

立川 安藤和代

鈴虫の音も細くなり長き夜を労る様に三日月冴える

秋鮭にとろけるチーズのせて焼く孫に好評犬も尾をふる 友からの届きしキャベツ朝の膳渥美の香りみづみづとあり

百舌の声ひときわ高く聞こえ来て孫婚礼の日の間近かなり

婚近き孫と語れば秋夜長最終列車の小さく聞こゆ

六十年過ぎても吾れを「安さん」と呼ぶ友のいて学舎うかぶ

北国は初冠雪と昨日今日吾が町三河は汗ばみし昼 小さなるしらすの命思う時その目に合えば食をためらう

晩秋のキララに光る竹島の海鳥は皆海の方向く 指おりて又指おりて孫短歌にチャレンジしている休日の午後

八ツ手の葉に動かず三日目青蛙家へお帰り冬はもうすぐ

見守りくるる

春日井 清 澤 範

朝夕の検温記録持ち斜視の女医高井先生の執刀を待つ

名大病院は十時に消灯九階の病棟に吾眠らむとする

一泊入院は夕食をする段階にて(ブドウトウ)の点滴を医師は外しぬ

手術中にも高井先生はさりげなく話しかけながらの手術は終る

入院は一泊入院にて斜視の点眼娘が優しく吾が眼に

女医高井先生の手術は四十分にて終り娘が優しく見まもりくるる

亡き夫のカーデガン着て過す小さき吾にはコートとなりぬ

「メリーさんの羊」の曲流れ来て時を待つ病院食の配膳の時

点眼は一滴差して五分おきピンクの液を又差す一滴

美容院へ娘に乘せてもらい来ぬ耳出しカットしサッパリとする 斜視の手術話しながらの手術なり名大病院の高井先生

男

あれは何ここはどこかと尋ねてた幼き頃を今思い出す

子月朝靄(小春日も日差し強きか照らされて焼けた濡れ縁素足歩けず

暗闇を抜けるは我の我が努力自ら光放つあるのみ子月朝靄のたなびく山裾を掠め優雅に白鷺の飛ぶ

我が過去が残るか否か別れ道我の有り無しこれからの我 歳重ね過ぎゆく時の速きこと今を味わう間なしが寂しや

朝昼の光の中にある青葉実に美し心洗わる

アルファ株デルタベータにオミクロン行き着く先はまだ先の先 この世とは思えぬ赤き生垣に我れ引き込まれ歩みを止める

幹太く枝を広げた柿の木も今亡き母の形見なりけ あの雲の下は晴れにもここは雨分けるそこには何が見えるか ただ一つ今年熟した我が庭の愛し柿の実捥ぐを憚る

雲の向かふに

東 京 矢 崎

直

小春空散歩の道にすれ違ふ会ふ猫会ふ猫鳴き声をあぐ

十三夜明日の月は見ゆるのか今宵は雲の向かふに照れり

秋の宵久しく見ずの明りにも灯の入るものも秋のともしび

こんなにも天気よくなるそれならば朝出がけから止めば

61

(V

のに

朝と夕ぽつぽつ雨に降られけり冷たき冬の時雨るる中に

八戸の街から駅に向かふバス通勤通学満員のバス

北国のバスを待つ人また一人バスの時間に合わせ寄り来る

日 の暮れし青森駅のバスを待つコートの内に北国の息

弘前へ運転士らの研修の声の揃ひし出発進行 バスを待つ学生押し競饅頭を出し抜けにやる相撲王国

散り紅葉

東 京 森 岡 陽

せせらぎの水の香りや散り紅葉川面にうかぶゆらりゆらりと

大田黒氏愛用ピアノクラシカルな洋館ホールにどっかり席を占む

高台の庭から乗り出す冬の薔薇月の明りに白薔薇鮮やか

帰り道冬三日月の姿あり冷たい空に静かな光り

寺の池落葉で隠るる湧水も鯉も見えぬがぶくっとあぶく 逞しく熊手かついで前を行く裏から見えぬおかめの笑顔

築山に山茶花の花こぼれ来て色無き石が紅色に染る

風に銀杏落葉は石地蔵に小さな御姿隠れぬ様に

庭園 の池のほとりに白無垢の花嫁の姿鶴の佇み

引馬野

|||白 井 信

昭

日和よき秋空の下孫を乗せベビーカー押す音羽川堤

堤防の道を狭めて黄に咲く名も知らぬ草よけつつゆけり

アパートの息子の家の部屋の内匠真が主役今日ハローウィン

ベランダの二階の敷居高きとも布団ほしゆく晴れ渡る朝

ジャスミンの剪定すれどまたしても新芽いでくるフェンを越して

巻層雲わがドアミラーに映しつつ家を出でゆく秋もたけなわ 遠面にもひと際高く開きたる三尺花火初めて見たり

霜月のわが誕生日すぎし今日息子の家にて祝いてくれぬ

農道の川に交わるひと処歩みを止める行在所あと

万葉の引馬野古道思いおり黒人詠みし「二見の道」を

皆既月蝕

郡 杉浦恵美

蒲

わ が庭の雑草すっかり枯れにけりそれはそれとて一寸侘びしい

秋 の庭放射線状山芋の蔓が 地面を這ひてゐる見ゆ

我が夫は還暦越えぬ宿りにてやり残しことさぞ多かりき

長良川夕陽に向かひて流れゆく左岸のわたしは露天湯の中 この鉱泉遠い山から長良河畔引かれしと云ふ鉄分の色

湯上りに長良の水の甘きことふと声に出る一人旅とて

球体を浮かべて赤き月上る百四十年ぶりの月蝕と云ふ

右下縁光が差して略といふ修飾の付く皆既

月蝕

綺麗などと云ふより侘し晩秋の月蝕ひとり眺めて居れば

木曽川 の橋を幾度渡りしか八百津に近づき水色深まる

ナッツ橡の実味噌味生姜味選び切れない八百津煎餅

輝やきて

豆川 山口千惠子

埃など払ひて保管庫掃除する今年穫れたる新米収めむ

忽ちに刈田となれる田の原を渡りくる風にかすかな匂ひ

散歩していつも通れる田の原に刈らずに残る稲田一枚

休日の午後に来たりてやすやすと廊下の電球とりかへゆきぬ 仰ぎつつ行きも帰りも見る公孫樹秋の終りの黄葉はじまる

歩かざれば足の筋肉衰へると医師の言ひたり散歩続けむ

友逝きてはや一年の過ぎゆきぬ垣根の山茶花赤く咲きゐる

買い替へし炊飯器置く台の上三合の米セットしてあり 再びは耕すことのなきわが田脇を通りぬ見つつ通りぬ

新しき炊飯器にたきし今朝の飯白くつやつや輝やきてみゆ

子規庵

Ш 夏 目 勝

弘

豊

ゆったりと下がれる糸瓜の緑陰ぞ今日の子規庵静かなりけり

終焉の子規の向ひし黒机小さきケイトウ小さき花ビン

激痛にて叫ぶ子規のその声がここ六畳に空想のひびき

子規用と机の一部を切り取りし黒き文机にて我も文字かく

ガラス越しに庭見し子規の喜びは今の我の何に当るや

ひたすらに思ひつづけし二十余年志賀皇子の陵に逢へる

一時のバス逃がせば六時までバスは無し田原東陵には行けぬかもしれぬ

石造り古式の鳥居一つのみ裏手の山より枝打つ音す

四方の山また陵も静かなりサワラビの歌声にくりかへす

秋萩は皇子の形見ぞ見つけむと高円山をただに歩みぬ

電柵をめぐらす峡田は実り色長く直ぐなる御陵への道

茶畑の整へられし緑の峡春日宮陵静もりのなか

陵の御前は吾と小蛙の飛び交ふのみの音なき世界

御影石の鳥居の前にて時すごす青きトンボの寄りてきにけり

泣く涙小雨と降れば笠金村いまし晴れ間より小雨落ちきぬ

『ことよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

稲荷ずし鮪にぎりの夕ご飯祭りのごときと君とほほ笑む

鈴木美耶子

遠くなりし子らとの日々よまた憶ふ秋の夕暮れのわ 沁み沁みとコロ ナ 禍 ゆゑに時過ごす庭に咲きくる幾多の花と が帰 る路

久しぶりに幼ら来たり墓まゐり健気な姿萩咲く庭に

見 幸 子

吉

堤防に釣り人ならぶこの残暑夫の姿なきここの岸辺よ

原正枝

牧

赤飯に空豆みそ汁お供へよ夫と見るはずの息子の新居

厚子

森

ふく午後のリビング

秋の風カーテン越しに浴びながら眺むる空に秋 の白雲

ふうはりとレー

スのカーテンをふくらませ秋の風

明け初むる空に白白月残り深呼吸する今朝の私

雨音にまじり勧行の声響くお堂

一の窓は

放たれ清

﨑 俊 子

Щ

古き友と「阿古野」の見物御園座 学校帰り手繋がんとす小学生「けがなおったよ」と我に寄りくる 伊 藤 晴

の玉三郎 の琴の音高

冬の日を窓辺にあびつつセー ター の解れ繕ふけふ の私

だんだんと赤み増しゆくこの箒木の丸きにけふの温き日差しよ

Ξ 田

美

奈 子

江

呆しかと問へば頷く AIのたまちゃん相手に老母はにこにこ 笙の音に包まれ粛々晋山式臨む御坊の若さ眩しさ

年毎 わ が畑へ水運ぶわれは力無く畑 に気力体力下降気味まだこれからよと心に思ひて の小道 に立往生して

話すこと途切れて夕餉の老三人観るとはなしにテレビ眺むる まだ淡きべつ甲色の赤とんぼ わ 'n の畑 の上を舞ひをり

> 野 絹 子

水

規 惠

牧

原

友 江

稲

吉

現代学生百人一首

東 洋 大 学

友人と距離を感じる標準語忘れたくない故郷の言葉

阿南工業高等専門学校五年(徳島県)

藤

田た

陸り

測量でかげろうできて誤差が出るピントが合わずとても悔しい 愛媛県土八幡浜工業高等学校三年(愛媛県)

山^ゃま

下た

平心

たくさんの付箋が辞書から溢れてる私の知識も溢れていくか

つくば開成福岡高等学校二年

(福岡県)

高

嶋

優

香

爆竹の音がすごいぞお盆の夜精霊船は静かに進む

佐世保市祇園中学校二年 (長崎県) 田た

曖め 菜な

中^なか

平和とは?僕が聞くと父は言う必ず自分に明日が来ること

佐世保市祇園中学校二年 (長崎県)

渕ゟ

万ᡑ

協調性あるかないかを言いながら散らばる雲に心は惹かれる

佐世保市祇園中学校三年

(長崎県)

石!

川かわ

胡る

桃み

扉開け耳に飛び込むセミの声連日の雨終わりを告げる

大分県立芸術緑丘高等学校二年(大分県)

藤さ

内ない

あ 歩_む

飛行機が欠航にでもならないか家族に手を振りひっそり願う

慶應義塾ニューヨーク学院(高等部)十年(アメリカ)

岩か

城ѯ

吉は

紀き

コンビニの入店音すらなつかしむ一時帰国は二年に一度

慶應義塾ニューヨーク学院(高等部)十一年

(アメリカ)

村ら が 薫る

中なか

贈呈誌

森 畄 陽 子

青森アララギ 第四百十五号

0 雀らのオンコの木の間飛びゆきて夕べゆくりなく雪の舞ひ来ぬ

0 葉の陰の蕾のハマナス摘みてゆく六月の陽浜に柔らかし

生あらば命ありせば成せる技瞬時に生くる一萬の霊

0

0 0)農耕の鎌の刃先を研いで待つ田打ち始まる辛夷咲きおる 一つだけ畑に残りし最後のいちご大きく甘きを二人で分け合ふ

浜

田

清

勝

木

浪みつ

ゑ

宮

]][

雅

子

安

住

晶

子

鈴

木

隆

之

0 ○どんぶらこ どんぶらこっこ どんぶらこ浮輪にのりて太陽抱く |鮎刺しの姿作りの香しく尾びれ一瞬ピクと跳ねたり 杉 Ξ

原 香 代

谷 良 子

○「ナズナすずしろ仏の座トントントン」とわらべ歌 唐土の鳥が渡らぬ先に 中 村 カ ズ

〇白き穂 の群がり広き山の背に御嶽の見ゆ 遥か雲の上

○庭に舞う鱗粉ふりまく蝶たちは黄泉の国への入り口探す

木 村 都 子 エ

高

木

啓

子

冬雷 2021年 12 月 号

0

橋

0

の上に佇み満月見てをれば暗き川面にカヌー現る 森 藤 ふ み

○青龍と名付けられたる淡き青の薔薇一輪が花開きおり

ハヤブサのカラスに追はれ止まり木を離れ保護区の空に飛び行く

田 江 美 子

黒

夜の窓こぞとおなじくやもり来てこぞのやもりと同じき動き

 \bigcirc

せ い 子

古

本

郷

歌

子

0 イイギリの葉に西日差し濃淡の透ける緑に実の映りおり

嶋 澤

直 子

伊

花が咲いてる

春は桜の 花ざかり

タンポポ れんげそう

すみれ

鐘が静かに 鳴っている 菜の花畑に

おぼろ月

夏は朝顔 おはようさん

せいたかのっぽの ヒマワリさん

おてんとさまと にらめっこ

ほおずき鳴らす子 かわいいな

橋 育 郎

高

すすきを飾る 満月に 秋はりんどう おみなえし

うさぎの餅つき ぺったんこ

つばき すいせん ふくじゅそう

冬は舞い散る 雪の花

雪割草が 春を呼ぶ

学校帰りに

梅の花

『俳句』

懐かしきかの人の文字秋扇菰樽の並ぶ参道秋祭

山

元

正

規

古書店の昼も灯ともす秋の雨

獣臭微かに森の秋深む棚田なる案山子は弓を持て余す

開いては無駄なメールを消す夜長

秋の宵パーカッションの交叉の手

ローム層の濡れ色の染む草紅葉 機首向かふ先に消えゆく秋夕焼

> 本 周

松

陽子

森

岡

コンサートの余韻纏うて月夜道

屋上に皆揃ひたる十三夜

通夜帰りひとしを淋しつづれさせ

教会の鐘の音海へ七竈群生の真つ赤に揺るる曼殊珠華

怪物のマウンドを去る暮の秋

浜

田紀

政

重 野

善惠

草の花雨の重さの 加われ ŋ 植 村

公

女

宇宙より笑顔の帰還山粧 月天心靴を忘れしシンデレラ

栄西は禅僧なりしお茶の花

パイにするには紅玉とコック帽

北吹くやクレオパトラといふカフェに

億年の進化か退化か銀杏よ

今

泉

由

利

柊の花の香りにつつまれて やまももの葉がえの落葉積 り継ぐ

ひとりゐて寂しすぎるよ神の留守

泉 如

今

雲

立冬の空に上りぬ三日月

小春日の行田の猫は縞模様

東京を照らして行ける冬朝日

木

村

歩 歩

矢 崎

直 人

小春日や戦に鳥のにぎやかさ

我が道に立ちはだかるか大蟷螂

夕しぐれ皇帝ダリアに侍者もなし

藁塚の影長かりし下校時

かさね吟行会 太田黒公園」 月

濱 田 紀 政

めた。 建し、 街である。 築き上げた裕福な環境で育った。十九歳でロンドン大学 家で当時経営が悪化 は元雄氏の父、 敷跡を杉並区が原型の保全を図り整備した。元々、 先は徒歩で十分ほどの太田黒公園。 など数々の賞を受賞している。荻窪は文化の匂いがする に出演し茶の間の人気を集めた。紫綬褒章、文化功労賞 十一月十二日小春日和。 音楽評論家としてNHKのラジオ番組「話の泉」 日本の各地に電気会社を設立した。元雄氏は父の 帰国後、 重五郎氏の所有だった。 音楽評論家として欧州音楽の普及に努 していた芝浦製作所 中央線荻窪駅に集まる。 故太田黒元雄氏 重五郎氏は実業 (現東芝) 吟行 を再 屋敷 の屋

重五郎氏をモデルにした処女作「浮雲」を発表している。 区に寄付されて公園になり、 俳人で角川書店の創設者である故角川源 一葉亭四迷は黒重五郎氏と現一橋大学時代親しく、 詩歌室や茶室が造られた。 義氏の屋

> 林暁、 んでい 荻窪を中心に阿佐ヶ谷、 亀井勝一郎らは将棋や酒宴の会を結成していた。 井伏鱒二、 横光利 高円寺周辺には多くの作家が住 太宰治、 三好達治

冬木立屋敷へ続く大いちょう

紀政

の 正 太田 黒公園



ŋ,

檜

0

切

区に

ょ 門

の門 築地塀である。 瓦ぶき、 元の大田 は ほぼ同 黒家

盛りにはライトアップされるという。 じ位置にあった。 樹齢は百年を越える。 鬱蒼とした巨木のいちょう並木がある。本数は二十七本。 正門を入ると屋敷跡に続く道の両脇に 今は紅葉はまだ始まりだっ

記念館に続く小径や小六月

京子

張ったもの)。室内には元雄氏が愛用したスタインウェ床は寄木張り(色や木目の異なる木片を組み合わせて評論始め随筆、小説等が七十六冊、訳書三十二冊に及ぶ。評価で元雄氏は仕事部屋として使っていた。著作は音楽記念館は昭和八年に建築されたもので当時は珍しく西

柴垣に触れんばかりに橙肥ゆ 正規クラシカルなピアノ置かれし室の花 陽子

サイタルのプログラムが飾られている。

イ社製のピアノや蓄音機が置かれ、

レコードや楽譜、

1]

女児の姿も…。 始めた。弁当を広げる女性達、七五三のお参りを終えた始めた。弁当を広げる女性達、七五三のお参りを終えた 昼過ぎになると小春日和に誘われた散策の人が集まり

七五三木洩れ日の園にポーズとる さち子

園には小川が流れていた。公園になる前からあったもれていた。 母親のカメラにポーズする女児にメンバーは作句も忘

だった。

ので、街の音は届かず、

深い森の中を流れるような水音

さざ波のもて遊びたる櫨紅葉 周二

管理事務所で売っている餌を投げる子達もいた。

川の深間には新潟県から贈られた錦鯉が泳いでいた。

池に落ち冬の蝶めく枯葉かな池の鯉波たて泳ぐ小春かな

素山

出させてくれた。家は農家で牛一頭を飼っていた。餌の私ごとだがちょろちょろと流れる水音は遠い昔を思い

公園を出際に結婚式の前撮りをするグループに会っ喉が渇くと水音を探して潤した。

草切りは私の仕事だった。学校が終わると山に出かけた。

ろう。た。カップルは和装だった。日本風のここを選んだのだ

も勿論、吟行のメンバーも小春に誘われた一日だった。 七五三の親子も前撮りのカップルも水音を聞く女性達

4 の徒然』 (一一七) 丸 Ш 酔 宵

子

京都へは、仕事をたのであります。 大し、たっぷりと2週間、贅沢にも晩秋の京都を堪能)月に予定していた京都行を、薄紅葉の一一月初旬にたが、コロナも取り敢えず終息の気配を見せていて、7年の京都の紅葉は一一月末から一二月初旬との予

京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都へは、大事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都には、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都には、仕事を含め毎年訪れていて、洛中洛東は畑京都には、1000円には 『サウナ、スポーツジム、ビジネス通常料金では考えられないリーズ-ケーション(ワーク&バケーショ十三間堂横にあるハイアット・リー 制は 覇勿

極でで暮 贅杯れ

に屋橋まで三○分。北新地まで大阪市役所を横にが町にも近く、京阪七条駅から大阪へ向かえば、何より、その立地環境の素晴らしさ。祇園にも 京都

地は川ので、等前 であ 、等フ伯 で 京都国 を を 見を 見渡 を 見渡 る .ズホテルと言う京都東山のベスト立)智積院。その横は、妙法院でその隣は館で、右に上れば真言宗名刹で長谷三十三間堂は道を隔てたすぐ横、目すぐ目と鼻の先。

中前の仕事を終え、ぶらりと京都国立博物館へ。レンガ造りの明治古都館(旧本館・重要文化財)が広大な敷地に堂々とした威容を誇っている。しかし、通常は閉館で、隣に新設されたモダンなガラス張りの平成知新館の「畠山博物館の特別展」へ。荏原製作所の創業者である畠山一清が蒐集した名品の数々をゆったりと見学。「耳塚」と書かれている。豊臣秀吉が朝鮮出兵した文禄・慶長の役(1592年~1598年)で、戦功のしるしとなる首級のかわりに、朝鮮人の鼻と耳を切り取り、戦勝の証として塩や酢に漬けて日本に運び、ここに埋葬したのである。因みに、豊国神社は豊臣秀吉を祀って全国に数多くあるが、京都東山の豊国神社は総本社でその唐門は国宝である。
豊国神社を抜け、智積院に向かって緩やかな坂を上ると、瀟洒な古刹の養源院の薄く紅葉した庭が目に入っると、瀟洒な古刹の養源院の薄く紅葉した庭が目に入っると、瀟洒な古刹の養源院の薄く紅葉した庭が目に入っると、瀟洒な古刹の養源院の薄く紅葉した庭が目に入っると、京都国立博物館へ。レンコールの東京である。

門をくぐ でうため、豊臣 めに建立し、妹で二代将軍徳川秀臣秀吉の側室である淀君が、父でぐって庭に入り養源院縁起が記さい。その長い塀をぐるりにぶつかる。その長い塀をぐるり、智積院に向かって緩やかな坂を、 ©川秀忠の 父である ?目に入っ

る絵ひ正 0 0 そり 杉戸 江. りと存在りと存在 で、 し城 に有名な「白色象」の絵が目の前ているが、驚くなかれ、俵屋宗達から移築した。三十三間堂の陰に躓 にあ襖

は言えないが、時雨に濡れ、妖艶な輝きを増した幻想のう。ライトアップが始まった高台寺の紅葉は未だ十分とう。ライトアップが始まった高台寺の紅葉の高台寺に向に乗って八坂神社を散策しながら薄紅葉の高台寺に向が、その「白色象」の本物に出会うとは・・・。が、その「白色象」の本物に出会うとは・・・。するが、その「白色象」の本物に出会うとは・・・。ない、そのボスターを京都のいろいろなところで見かけたった。「京都が日本にあってよかった・・・』との洒落たった。「京都の観光ポスターでこの俵屋宗達「白色象」をバッ京都の観光ポスターでこの俵屋宗達「白色象」をバッ 世界。 うに が コ ク

そう お道 高界。 洒 「洋入れたの」

衣でラ ター る。 園や メ /ニュ 一号し ック服を凛々しく着こなしたお嬢」且つ大満足。お店を出るときにはして茶漬けセットだけなのであるユーはいたってシンプル。特製シューはいたって お嬢さんが、よめるが、これがあるが、これが わいがエ がた秀ビわ白逸フ カ 昔潤 お は 一店 7

> 段も大人ですがけて見送ってく 出 ですが、京都なってくれるので 聞らしい素がである。 い素敵な洋食屋さんでありる。将に大人の洋食屋。お曲がるまで、しっかり頭を めりま お値 下

マパークである。驚きと好奇心を掻き立たせてくれる、将に、ことほど左様に、京都はいつでもどこでも つでもどこで も、 歴史のテー

何に出会い、何があるか・・・驚きがあるのであるからして、うい、何があるからして、うい、コーラー・ と散歩し これからの二週間、 てもこの ような発見 また لح

00) 薄紅葉夕暮. ħ に 1映えるねねのに濡れる二寧! の坂

11 月1日 3 花先先み先ラ六大祇四が先た 見斗斗し斗マ条阪園条ん斗京 小町町な町ン カラスヤ 条河原町 ・こ寿司 一二 ・上のほね お店 月二 村 城 ね

6 5 日日 水炊き パ スペ 1 りゅうちゃん K イン - ライ、 ベ ル

4

 \exists

寧

坂

121110987

まんざら、 В ĀR ヌ ベ 1 ル 佐

2021年11月30日

楽し Ü 時 間 1 Î

Ō

Ш 本 紀 久 雄

団十

込み、「古武士を気取って力んで居る」ようになってきた。 明治7年(1874) 《備後の三郎や楠正成を演た処から、 九代目の 追及は、 頃から、日常の生活空間に「古物」 舞台面の虚構性排除だけに止まず。 全体が古物好きであった を持ち

故実家へ往って聞たり、調べて貰たり仕たが聞くばかりでも不可い、ら無いやうでは迚も武士に扮する事は出来無い。乃で私は方々の神は写され無いと考べた・・・たとひ舞台たりとも弓矢の骨法を知鎧の着やう、弓矢の骨法を心得て居無いやうでは、迚も武士の精 ねば成ぬと、恁う思ひました。俳優が武士に成て舞台へ出るのに水干の区別、又は鎧、腹巻、胸当、矢搦みの法などを覚えて置か水平間の着方、装束の故実、其着やうから、袍、直衣、狩え、ために欠かせないものだと次のように認識していた。 実地に稽古をして見無ければ成らぬと思つて、旧有馬家のお装束 めた「古物」を身に付け、こうした行いを「武士に成て舞台へ出る」 は舞台の上のことであろうと誰もが思っていたが、九代目は買い集 居つたので、その頃人が見て、団十郎は少し気が変だと云った位で 将髷といふやうに後へ下げ、自分はズッと古武士を気取つて力んで いのに無暗と買込んで、床の間と云はず座敷へ並べ、あかん平 らうが、急に弓矢、鉄砲、槍、長刀、馬具、甲冑等を、銭もな した》(『明治歌舞伎の成立と展開』漆原その子著 九代目がいくら武士に憧憬を抱いているといっても、実現するの 九代目の甥であり養子)の髪の根元を紐で結んで、俗に大 慶友社) (筆

> の新富座興行における『天下一忠臣蔵鑑』への出勤拒否につながっ このような「真物」追及の結果は、明治17年(1の武士を追体験しようと試みたものであったといえる。 九代目が日常生活において「武士を気取った」ことは、 (『明治歌舞伎の成立と展開』 追及の結果は、明治17年(1884) 9月

この『天下一忠臣蔵鑑』は、

赤穂浪士討ち入り事件の推移を忠

し、そのためこの興行は、結きの場」への出勤を強く拒絶にはない「十八ヶ条の申し開かし、九代目は実際の事件 のひとつが、九代目扮する大 くなってしまったのである。 局初日を迎えることができな 申し開きの場」であった。 石内蔵助による「十八ヶ条の ある。この芝居における眼目 実に描き出した『忠臣蔵』で

の虚偽は、実際に起こった事 き」は、 適うもの、すなわち「心裏を 件の推移と「当時の事情」に 虚偽」にすぎない。だが、こ 後世講談師が作り出した 確かに「十八ヶ条の申し開 一場となる。 ものであるとき、虚 九代目が言うように

師で有た松岡と云ふ人を呼んで束帯の法から甲冑の着様まで稽古



ヵ条申し開きの場)

客の内に描き出されていくという効果が生ずるのであつて、結果とてではなく、想像力に裏打ちされた豊かな世界として、より見物ことで、実際の赤穂浪士討ち入り事件の推移を、単なる知識としという芝居は、「十八ヶ条の申し開きの場」という虚構が介在する

出勤拒否をしたように、あくまで「真物」追及を貫いたのである。しかし、九代目は「後世講談師が作り出した」虚偽であるとして見物客には「事実」として受けとめられていくのである。

冷笑」した。 の邪道」として批判的に受けとめ、「ある者は痛罵し、ある者は一方、見物客は、「故実を正」すという「過去の羅列」を「一種

であろうか。
たはず。このような状況に至ったとき、人はどういう行動を採るのたはず。このような状況に至ったとき、人はどういう行動を採るのこの当時の九代目は孤軍奮闘、孤独であり、精神的に大変だっ

古武士に憧れていたはず。
誰かに、何かを求めて会いに行くのではないだろうか。 九代目は

九代目が向かったのは跌舟であったが、当時の跌舟はどういう伏剣の達人といえば鉄舟しかいない。鉄舟である。江戸無血開城を成し遂げ、明治天皇の侍従であり、明治時代、古武士風格を持ち得た人物を挙げるとすれば山岡

況であったのか。
れ代目が向かったのは鉄舟であったが、当時の鉄舟はどういう状

安府の明治13年(1880)~明治18年(1885)における ・ 会所の明治13年(1880)45歳 3月30日払暁 大悟得て滴水和明治13年(1880)45歳 3月30日払暁 大悟得て滴水和主なる事績は以下である。

つまり、侍従就任時の年齢が37歳、大悟したのが明治13年の45皇権書で認める

歳、侍従を辞したのが

ように述べている。
この当時の鉄舟について同じく侍従であった高島鞆之助は以下のこの当時の鉄舟について同じく侍従であった高島鞆之助は以下の心の完成期を迎えた10年間を、明治天皇のお傍近くで過ごした。明治15年(1882)の47歳であるから、最も精神的に鍛え上げ、

(『明治天皇』渡辺茂雄著 時事通信社) ことを以て臣子の分とこころえ、直言してはばかるところがなかった」ことを以て臣子の分とこころえ、直言してはばかるところがなかった」 年時代から心身を錬磨しているので、躬行もって君に善をすすめる たが、中でも山岡鉄太郎のごときは誠忠無比の士で、ことに少んだが、中でも山岡鉄太郎のごときは誠忠無比の士で、ことに少 「天皇の御身辺には、いつも剛健廉直の士風をもって忠勤をはげ

意味である。

意味である。

意味である。

意味であり、「躬行実践」とも言うが、どんなに立派なでという意味であり、「躬行実践」とも言うが、どんなに立派なでという意味であり、「躬行生活としたい。「躬」 は自分

しかし、見物客は「故実を正した」舞台が、あまりにも「今時代を調べた結果で舞台を構成することにまい進したのである。問の解消、それが「活歴もの」であり、「すべての拵え」をそのの方向性、これを受け入れ、かねてから問題視していた舞台の疑の方向性、これを受け入れ、かねてから問題視していた舞台の疑った(『新聞雑誌』第40号 明治5年4月)という新たな芝居 九代目も同じである。明治政府が布達した「都テ事実三反ス可

かけ離れていたので、不満をもらしたのであるたのである。今まで見慣れていた様式美というべき歌舞伎世界ととして受けとめるどころか、「絶対否認」という拒否反応を示し

までの芝居において見ることがなかった新式」であったため、「事実」

会得したのか。 次号続く。 ここに九代目が鉄舟のところに通う意味があった。 果たして何を

- 41

同年16年 (1883) 48歳

として川田剛が漢文で記し、明治の三筆の一人である巌谷修が六

宗」を岩倉具視に献上。岩倉は鉄舟が賜った経緯を『正宗鍛刀記』

谷中に全生庵を建立。「武蔵正

絹の話(134)

「アトリエトレビ」 今泉雅勝

絹でアスリートの着衣を作ってみたら

て来ました。

て来ました。

で来ました。

で来ました。

で来ました。

で来ました。

でいます。

でいまで

でいる事が判っ

でいまで

でいる事が判っ

で来ました。

絹利用の歴史

古代(5千年位以前)、人々が繭から生糸を揚げるよ

激し

して多用され、他に敷物や紙が作られました。す。これはフエルト加工などされて兵士の護身用着衣と様になりました。そうすると70%以上の残糸や綿が出まうになると薄く艶やかな織物は権力者や貢物に使われる

絹を着用した兵士は従来の麻より軽快で防矢性

優

n

次に絹を奪うべし」とされていた事からも、絹が重要なす。蒙古の戦略は南に侵攻した時「先ず銀を奪うべし、測すると絹と羊毛混のフエルトであった様に思われま寇の役の時日本に来寇した蒙古兵の姿は当時の絵から推発されませんので確証はありません。後世になって元発見されませんので確証はありません。後世になって元、戦闘能力が格段に向上したと言われています。

様に作った物…織物よりも緩衝性が高い)和紙の様に糸を吐くので、蚕を幾頭も並べて漉いた紙の様です。(平面繭とは蚕が広く平たい所では繭を作らず、しでも刀傷を防ぎ、蒸れる汗と臭気を軽減しようとしたしでもでも戦国時代には甲冑の下に平面繭を着用し、少日本でも戦国時代には甲冑の下に平面繭を着用し、少

軍事物資であった事が伺えます。

絹のアスリート着用に期待される機能性

性豊かな肌になじむ素材で緊張感も和らげます。 絹は糸が細く手触りが柔らかで空気を沢山含んだ親和

で、

すので ころが絹 (木綿 が気化され 0 は 3倍 素早く正常な保水値 る時、 !の速さ)、 気化熱が体温を奪 アスリートは に戻ろうと放湿 ます。 体温を 奪 しま わ

た状態が維持されると思われます。 働きをしていますので、 れる時間 のようにコントロールし また絹の繊維の6%の非結晶部分は空気と水分を溜 が短く体力の消耗を防ぐ アスリートの着衣もサラットし て繊維の湿度のバランスを保つ 事が出来ます。

池

えられます。 も蓄積される活性酸素を中和したり、幸せホルモンの分 泌を促したりしますので快適な持続力が維持されると考

さらに絹の20種のアミノ酸のあるものは疲労によって

7種類の糸の中で、 けた時、絹の静菌作用で大事に至らない効果もあります。 蜘蛛絹 なお絹は緩衝性にも優れていますので、 『突したりした時身を守ってくれるばかりか、 の研究は緒に就いたばかりですが、蜘蛛 獲物が巣にかかった時、 物が当たった 獲物を巻き 傷を受 が出 す

取る糸は獲物が暴れるとその刺激 動きを止 激を受けると収 か解明されていませんが、 道を模索して行きたく思っています。 め労せず獲物を確保出来ると言う仕組みです。 縮する系とはどの様 将来のアスリー で糸が収 な物性を持ってい 縮 1 獲物の の着衣

アスリートへの

シード いてもらいました。 結果はシード権落ちとなり、 これら 権内は常連の東京農業大学の \hat{O} 事を実証しようと数年前、 絹の 靴 選手に 下の話は話題に 箱 絹 根 駅伝 0 靴 で当 下 を履 0) 時

の加工技術と機能性の研究をさら ぼらなくなってしまいました。 しかし長時間激しくプレーするサッカ に重ねた着衣を開 Ĩ 選手などに 絹

てみ必要があると思っています。 |険家の植村直己氏は冬山登山

. の 絹

の下着は体

力

0 消

は絹 員の下着にも絹が使用されている様です。 すると事があると体験談を語っていました。 耗を防ぐと言っていました。 の下着は 汗の気化で体温を奪う時間 特に雪山にビバ が短く、] 南 極観測隊 クする時

絹の 弱

に弱 ノツト また絹は 絹は繊維の 昨今の絹靴下は 加 ので10 要があります。 罡 酸 などして 縦 もアル Ŏ はポリエ % の張力は鋼鉄より強 補 靴 力 下 強 などは IJ L ステルやポリ てい も弱く洗濯など中性洗剤を . ます。 耐 ! 久性に欠けます。 ゥ 1 のですが、 タンを イブ 摩擦

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

https://hondachiro.exblog.jp/

122021年12月3日

気がつけば12月

今年も残すところ1か月をきりました

師走というだけあって 何かと慌ただしくせわしなく感じます

こういう時こそ

普段のルーティンをなるべく崩さない様に気をつけたい

のですが

中々難しいですよね

無理に普段通りにしようとすると

ですので

それがストレスになり余計に身体へ負担がかかったりし

というのも大切です

その時にあった身体を労わる生活スタイルに変える

例えば

3S+ゆたぽん の中でも

特に重要なのが睡眠です

23時までに寝る事だけは必ずやる

といった具合に何を最優先させるかというふうに

していくのも良いですよね

くれぐれもご自愛ください 今日も笑いながら行きましょう

腎臓に関しては

2021年12月6日

この時期の目の不調

朝の冷え込みが年末を感じる様になりました

空気が澄んで気持ちが良いですよね 冬になり

目の不調が出やすくなります

目の乾燥

空気が乾燥して気温が下がると

スマホやパソコンなどの見過ぎ

腎臓の問題

スマホやパソコンなどの見過ぎは などなど色々な原因があります

自律神経を乱し

更には睡眠の質も落とすので要注意です

脳を疲労させ精神的にも問題が起こりやすく

冷えや疲れ 気温が下がると水分摂取量が減りがちです 水分不足などの問題からきます

ですので

水分摂取量を増やし小便の回数を増やしましょう 飲みやすい水分であれば何でも良いので

大便の固さにも影響が出ますので切れ痔などの

年末になりアルコールを摂取する機会が増える方も 予防もしていきましょう

いらっしゃると思います

アルコールは身体の水分量を減らすので気をつけて下

うね

年末年始

体調を崩さない様に気をつけていきましょ

さい

今日も笑いながら行きましょう

上浩二の独り言」 49 江 Ŀ

浩

小さな初めての記憶

する回答が出来るか否かについて呟きたい。私は年を明 記憶はどのような事であったのかという疑問とそれに対 けて令和4年で9になるが、 とばを認識する前に目の前にあらわれる映像との紐 る時①、それに続く当時住んでいた横浜 わが身を振り返って、 (タグ付け) のは話 店 経緯の説明はあとにするが、恐らく年は幼稚園入る街のおもちゃ屋②が自分で言える最初の記憶だっ か前のことであった。。 前、赤子の成 おもちゃ屋②が自分で言える最初の記憶だっ しについて述べた。さて、子が成 長、特にことば 自分の小さい時の記憶、 母親の背中に負ぶさってい の習得と赤子の聞 鶴見の生麦の 初め ての

関東大震災で横浜も相当な被害を受けた、 0 する事例をあげたい。 話を引用して、 は初めてではないが加飾された小さい時 以前呟いた。 ∃な被害を受けた、実父が2才のこの加飾された記憶についてはが加飾された小さい時の記憶に相

なる時期に入園)前後の記憶は沢山思い出せるのであ 自分では それらを列記する 幼稚園 当時は2年保育が普通で4―5 (正確な年代や月日の順序には欠

> ける) と次のようになる。 たかは定かでない 列記する事柄を全て生前 0

> > 両

が大事には至らなかったの炬燵で兄と母が少し一酸化ガスの中毒になったようだ億)に部屋の移動があり、北側に移動した部屋で練炭式 中年 団に横たわり死に直面していた。住んでいた間 んでいた(おばさん(0 勤め 「写真が残っている)。確か二階に住んでいた る会社の社員アパート・木造 (岡田さんとい う苗字か)が胃がんで布 (私の記

粘土層があり、見つけては集めて粘土遊びに使ったそのの斜面が関東ローム層で所々に赤茶けた土に薄く鼠色の ぱなしのボールを拾い集めて、景品と交換した。競輪場競輪がない時に入り込み、当時珍しかったゴルフの打ちっ] アパ ム層の斜面に防空壕があって入るなと注意された。 ートの東側が小高くなっていて、競輪場があっ

 \Box

屋の たがすぐに捕まった。少し広い広場 宅の家からTVが盗まれ、 であった。一番立派だったのは東京電力の社宅は当時平 近くは所 1戸建て、当時高 を隣に所有しているある会社の独身寮の管理人家 謂京浜 I. 業地帯の企業の社員アパートだらけ 価な白黒TVを持 自転車の 荷台に括り付け逃げ 野球が何とか っていたその社 ヘでき

ようなものが冷やされていた。遊ぶには年代 り込んで遊 女が入り混じって今考えるといい経験であった。 年の んだ。珍しい大きな冷蔵 い子供 が いて、広い管理 庫 岸があって、 八の部屋や食 の上下・ や食堂 麦茶 茶の子に入 男

幼稚園 ラジオ体操もこの公園で当時は毎日やった、お立ち台は 当たりのホームランとか)があったようだ。通い始 の先を行き左に曲がると、 てもらったが、 0 0 野球 宅ば たら泳ぎを習いたいと記憶 小学校から大人たちが運んでいたのを見ていた。 て、母親と説明会に出かけた。通った幼稚園の庭木造平屋の板張りのだだっ広い部屋がある児童館 の近くに公園 運動会はその公園でやった (写真がある)、 アイスクリ お嬢さんが か りの地 その家の名は覚えていない。そ 域 ~~ム(舐めて食べ終ると2塁打 があり珍しくプー いて珍し であったが、 近くに駄菓子屋があり、 いテニスのラケットをみせ ľ 庭付きの一軒 ている。その公園 -ルがあり b, 罪家があ の一軒家 大きく アとか棒 夏の庭 夏 0 8 た Ó

で歩き回 ·ある。 の学校の学区域まで行 わ 0 れて分れて 凹ることが好きで、。幼稚園時代の事 れていて、 0 庭奥に しまってあるものを取り行かされ の事だが私は小さい頃から遠 やは こって帰る 同じ幼稚園 り防空壕があって物置 () が遅くなったことが、) 稚園の女子が住んでい くま た記 とし

> たが当 「時大人は気にしなかった。

大学へ入学する年代のお兄さんや少し若いお嬢さんがいに習いに行かされた(就学以前のこと)、その家には当時 たようだ。筆は右手で持たなければならないのであるが、 習いに行かされた(0 左利きで、 親が心配 (就学以前のこと)、その家には当時 して近くの知り合 い宅に

隠れて左手でも書き今でもペン、筆の左手書きは出来る。

ていた兄もアパートへ戻らなければそれは父が入院中に姉に当たる叔母 さて、 それだけだが、続いて父が退院して会社のアパート へ戻るとき、 きものかもしれない黄色いカステラがあった。 父が胃潰 5 ある病室へ母に背負われて行き、父の病室 てい 当時ガラス格子張りの戸で仕切られてい のおもちゃ屋で兄がおもちゃをせがみ買 私 たことが鮮明に残っている。 0 瘍 初 初めて兄がいる存在を覚えているのだ。 8 0 ての記録 ちに聞 L姉に当たる叔母の家に預けられ 憶の経緯に 1-12 た)で入院し、 つい ならない て呟 木造 で、頂が移動になる。 っても

が残り、 るのである。 なぜ 小さな子の記憶は 後で言葉とい <u>ー</u>の二 つの状況は うタグで紐付けられ 言葉よりも先に視覚から入る映像 私には絵が描 る理由と信じ け る 0 で





花 野 みぷ り



降り かる。 シャープになる。 初 狩 た日はきまって晴天、 する寒さが田 朝は霜でまっ白になる。 は 0 降ることは少 んぼにも畑に な 山の 強い も襲 が 稜線 霜 61 底 がの

を用意 士山 楽しい。風の無い日を選び、バケツに水 する。 ばならない。 と品質向上のために 合わせてしまう。 まないと煙をもろに吸い込むことになる。 ている脇で、 分ほどの初狩藤沢集落からは、 んぼからは富士山 寒さとともに晴天の日が多くなり、富 田や畑が凍らないうちに、 [の見える確率は高くなる。 私たちの Ш 枯草に 「が見える。 火をつける作業は…… 燃やしていく。 トラクターで田起こしをし 害虫駆除のための野焼きを なんだか有難くて手を に田起こ は見えないが、 しをし 風向きを読 来年 見事な なけ . О 車 実 は

Ħ. 田

年輪

· 屋 保 之

ができるのは同慶の至りである。 ロナウイルス禍のあの騒ぎは何だったのだろうか、とも思える。とにもかくにも無事に、もう一つ齢を重ねること 二〇二二年を迎えた。昨年の東京オリンピック・パラリンピックも遠い昔の出来事のような気がするし、 新型コ

長してゆくことができるという意味合いから、私は『年輪を刻む』が好い。 意味が違うように思われる。「年を取る」とは、年を増すごとに己の人生から責任を一つずつ取り省いていく生き方、 「歳を重ねる」とは、歳を増すごとに己の人生に一つ一つ責任を重ねていく生き方、と解釈する。生きている限り成 年を取る、 歳を重ねる、年輪を刻むなど、様々な言い方があるが、「年を取る」ことと「歳を重ねる」ことは若干

というのがある。この「他人を助ける手」がユニセフ親善大使だったのだろうか。 愛を知った証。今の顔がいちばん好きです」と堂々と言い放ったそうである。また、彼女の言葉に「年をとると、 うが綺麗だ」と語っている。親善大使時代の会見でオードリーは、「確かにしわが増えましたが、これは私が多くの 晩年の佇まいがまさにそれを体現してくれているように映る。彼女の旧友の一人が「君は歳をとったが、現在のほ げたい。「ローマの休日」での可憐な姿から、最後の出演映画「オールウェイズ」や、ユニセフ親善大使としての最 ハム・リンカーンが残した言葉だそうである。見事に『年輪を刻』んだ人物として、オードリー・ヘプバーンを挙 人は自分に二つの手があることに気がつきます。ひとつは自分自身を助ける手。もうひとつは、他人を助ける手」 私は、倍賞千恵子のファンでもある。今年八十歳になるそうだが、、年齢なんて、ただの数字に過ぎない、と某新 「四十歳になったら、人は自分の顔に責任を持たねばならない」とは、第十六代アメリカ合衆国大統領のエイブラ

聞のインタビューに応えているのを目にした。私は勝手に、素敵に『年輪を刻』んでいるひとりだと思っている。 等な立場で力を合わせて人生を楽しむのを生きがいとしていると語る。若い頃にあったであろう様々な体験を糧と 東京都北区という下町育ちの彼女は、大女優となった今でも近所づきあいを欠かさず、肩書などには無縁に皆が平 して現在に活かし、心身ともに健康でいる、『年輪を刻む』とは、そういうことなのかもしれない。鏡に映る我が姿

らこれはできない」。このような発想は、その人の人生の可能性を狭めることになる。その通りだと思う。 「年齢は限界を決める指標にはならない」 これは、元プロ野球監督の野村克也の名言のひとつである。「何歳だか を見るにつけ・・・である。

| 今年もよろしくお願いします。| 目出度さもちう位也おらが春

元旦の朝光 塵を払うが如し

活として清新

空庭の骨樹

仰ぎ見る富嶽 西天に祭たり

多少の感懐 一身に生ず

新 春 有 作 多少感懷生一身空庭骨樹活清新

仰 元 観富嶽 旦朝光. 加开聚

(語釈) ○空庭…誰もいない庭。 ○骨樹…葉を落した木立。ここでは梅と桜の木。○粲…あざやか。きよらか。 ○感

懐…思い。 (大意) 元旦の朝日は塵を払うかのようだ。 庭の、 葉を落とし尽くした梅と桜の木立は、 朝日に照らされて生き生き

目をやれば富士山 が晴れた西空に輝いている。そしてわが身には多少の思いがふつふつと生じてくる。 平成三十

年元旦の作である。

として清らかで新鮮に見える。

て帰る。 ても、少し励まされたり、それよりも心しなければいけないことを少し印象に残す。だるまを買い、くず餅を三箱買っ みくじを引く。因みにおみくじはもう一つ。川崎の稲毛神社で引く。どちらか良いのを財布に入れる。 ※元旦の朝は長男と車で朝六時半に家を出る。七時六分が日の出というが空は開けている。川崎大社に詣でる。 いずれにし

途中、 家の近くの神社とお寺に寄り、 一旦帰宅、 庭の地蔵に水をやり、 書斎に二経を上げる。 家族四人でお屠蘇

を頂く。

交歓を行う。かくして元旦はほぼ祖宗範に則る。

午後十二時過ぎに事務所により、

だるまを飾り、

稲毛神社へ。

幹部会員とお祓いを受ける。

改めて事務所で賀詞

偏願安寧に父母の姿へんがんあんねいちちははすがたへんがんあんねいちちははすがた異郷に遊子となり返無期いきょう ゆうし

夕々切々帰羇を促す くくせつせつきしん うなが 庭院は碧花が咲き蛍が飛び交った 偏願安寧に父母の姿

異郷遊子返無期

匆匆切切促歸羇庭院碧花蛍火亂偏願安寧父母姿

,泉 由 利

○旅人として異郷にありいつ帰るともしれずの旅人として異郷にありいつ帰るともしれず

ことのはスケッチ 371

2009年(平成21年)11月 泉 由

利

新しく三河アララギ

は無理になっていた。 ど前から会費だけで、歌誌を発行し運営をしてゆくということ と二ヶ月分しか発行費がありません」と報告された。 折にふれ経済状態は報告されてはいたけれど、本当は七年ほ 三河アララギの九月編集会、会計の方から遠慮がちに 「あ

来ません。 と父御津磯夫、母今泉米子と…「続けない」選択は私には出「続ける」ことをモットーにしてきた三河アララギの先達 きたのだけれど、すぐに綻びることは心得ていた。 編集部の節約とボランティアと私の繕いと…で長らえて

誌の 厳かなことでした。 今泉米子が見守っていてくれたのでした。私の心に、とても 主幹の御津磯夫が、日本に帰ってきた私に、三河アララギ 「割り付け」を教えてくれて、そして私と交代した日。

充分に承知していました。 三河アララギは世襲とか、そういったことではないことを

めたのでした。 ま日本から一番遠い距離の国、アルゼンチンへゆくことに決 ゆきなさい」という主旨の歌詞。父が作詩しました。 私は潜在に律義な性格をもちあわせているので、教えのま 御津南部小学校の校歌は、「この御津から世界に広がって

現実となると父は「何処へも行くな。ここに居て、 字を書

> 言い、外には大変喜んで送り出してくれたのでした。 いたり、絵を描いたり、織物などをしているように」と内に

ら」と約束をして出掛けたのでした。 「ちょっと行ってくるから、そして、ここに帰ってくるか

母に伝えました。 一度も外国へ行く機会がなかった父母のために、私が見 私が出会った外国の全てを、短歌に詠み、随筆にして父

どんなに遠くにいても、父と母と私と、一つの心、一つの

理解を感じていられました。 三河アララギの皆さんに守られていた父と母の幸せ、生き

た会員の皆さん、これからも、三河アララギを続けてゆくこ 甲斐だったこと、そして、三河アララギを続けてきて下さっ

なのだけれど、お金の掛かる母親を「養わなければいけませ とが私の出来る皆さんへの恩返しだと思っています。 ん」と、教え込まれた二人の子供が、私を守ってくれていま 益は全て施設に寄付をするという、滅茶をして頼れない会社 う発想から始めた私の会社は、 何を守るにも「経済力がなくてはどうしようもない」とい 当然のこととして、祖父母の三河アララギが続いてゆく 自分は無給で働きつづけ、

ことを心しながら。 河アララギを楽しんで下さい。 三河アララギの皆さん、どうぞ気を楽にして、 思う存分三

創美の社長、日向さんがプレゼントして下さいました。素っ 頓狂な注文もこなして下さっている技術の石岡さん、 私の夢だった一人一ページの短歌スペースを、印刷会社桜

とうございます。 故に、会費の値上げをしないで続けてゆきます。

ありが

「氷魚」のことから (25) 岡本八千代

の心とふるさと山形」というのがある。私の持っている本に短歌研究社の出版した「今甦える茂吉

て茂吉のことを探ってみよう。

- ・母系の祖父は酒客であったので、母は若くして中症になっ・「私の母は家附きの娘で、父は入婿に来たのであった。
- てあげた人だった。その中症になるまで、母は農婦として働き、私等同胞を育

た

- ・ついに、仙台も見ず、東京も見ずじまい。
- ・時々流行性の結膜炎を病んだ。(やんめ)
- て流れて落ちている。
 ・不動尊は巌上に祠ってあり、巌を伝って清冽な水が瀧になっ
- だった。 しめ、その瀧の水でながく目を洗うので参詣は半日がかり 母は私を連れてゆき、目を直してもらうように祈願礼拝せ
- くれた。その餅のことを、綿入餅と云っていた。餅は二厘・返りには村はずれの茶屋で、大福餅のようなものを買って

私はそれを買ってもらうのが嬉しく、

急性の眼病を患い

な

- 母系の祖父は酒客であったので、母は若くして中症にながらも母に手を引かれ、喜び勇んで不動尊に参拝した。(B
- 母系の祖父は酒客であったので、母は若くして中症になっ
- ると「死にたまふ母」になる。を買ってもらったというそれだけなんです。それが歌にな働き、信心深く迷信深く、茂吉の思い出は帰りに大福もち。この母親像は、つつましく、仙台も知らず一生農婦として
- ・父親が亡くなった時は、通り一遍の歌を二首しか作っていない。
- •しかし「念珠集」という父親のなくなったことには、E
- くこにはあまり似寄の無いことに気付くのであったが」の競いの尠ないものが、たまたま父の一生を思い起こすれて隆應和尚から草稿を書いてもらい、政談演説をしたり、れて隆應和尚から草稿を書いてもらい、政談演説をしたり、れて隆應和尚から草稿を書いてもらい、政談演説をしたり、また段にがいとこ。しょがいな。三さがり。おばこ。木挽ぶし。くは若い頃、田植をどりといふのを習ってその女形になっくは若い頃、田植をどりといふのを習ってその女形になった。

と書いてある。」(「念珠集」「日露の役」)

- 私もそう思う。それではやはり母親似の実直さに似ているが自覚していたらしい。とか、父親は茂吉とのイメージがつながらないと茂吉自身・これも茂吉のお父さんが村芝居とは言えども女形をやった・
- 茂吉かもしれない。次号へ。

編集室だより【二〇二一年十一月】

由 利

0 ブェノス・アイレスに住んでいた頃、仕事と子供達と そんな生活だったから、、徐、は、どんどん増え続けた。 モデルさんが、通ってきて、モデルをして下さった。 自宅にも、 んの友人のアトリエで、絵を描いていた。 ペラルタラモス」と、最高級の名前の主、セリーナさ 緒にいる時間以外は、アルゼンチンに着いて、 私を見付けて下さった「セリーナ・アラウス・ 自分専用のアトリエがあり、「アマリア」

○カリフォルニアに滞在していた時も、子供達が学校へ リフォルニア風のアトリエに通い詰めた。 行っている時間帯は、 フリーウェイを突っ走って、カ

〇ニュ 性も、 …。モデルをして下さるのは、老も若きも、男性、女 何十枚にもなる。 さんの動きの一瞬が一枚のクロッキーだから、毎日、 ジの上を自由に歩き回っていて…時々ポーズをしたり トリエに、 1 、とても太い人、やせっぽちの人……そのモデル ヨーク滞在中も、玉由の家の近く、地下広いア せっせと通った。 仕舞うにも、破棄するにも、大苦戦。 モデルさん達が、ステー

> ○あちこちの国、 き連れて、今、 くしている。 三河アララギ発行所と住む家を埋め尽 移動した先々、出逢った品々、みな引

○描いている恍惚感を…出逢えた喜びを…慈しんでいた ちゃ箱の中に入っているような家の中。 も心も届くところに、しっかり居て欲しくって、 い。仕舞い込んでしまって忘れてしまわないよう、手

○縁あって、私の所に来てくれた「バカラのグラス」も 美味しいんだろう」。思い出も美しく蘇る。 毎夕、まん丸の氷を入れて、シーバス注いで…「何て 目と心と、届く範囲に全部置いて、テレパシーを交信

○コロナ菌が現れる前は、外に出掛けることが多かった。 た。けれど今、しっかり家に籠って、ゆっくり回りを し合っていたい。 見渡し、沢山のことが、私の心に戻ってきた。 家で待っている私の品々に、心を配るゆとりがなかっ

○コロナ菌は、ゆるしがたいが、何らかの必然からはじ ようになりますように。 まったことだと思う。その必然を、良く研究して、 ロナ菌の必然を消滅する。 地球に安心して、 居られる

より賢く、注意深く、生きてゆけると思う。

アルゼンチンつれづれ 14 1979年12月号 『カーニバルのお面

実に世界のどうでもよい品々を集め続けています。 人も「これはめずらしい、日本から持つてきたのですか」などと言うようになりました。子供達が「お母さんの博物館」という私の居間は、確 魅せられてから、それも収集家というでもなく、折につけ、出逢うにつけ、その時々の私の思いを面にとどめて増えていったのが、アルゼンチンの 北部サルタ地方に住むチャネー族が、パロ・バルサのフカフカと軽い木を刳り貫いて作る収穫の祝に使う面です。下手糞に出来ているこの面に ない、ただ平たい牧場の牛達もさぞ困っていることでしょう。雹に当り、目がつぶれた牛のこと、跛になった犬のことなどよく聞きます。シャッタ 古い葉と春の葉の色と差をつけて急激に延び始めたコーヒーもその他の草木など大丈夫かしらと思ふ。天から降る激しい物を避ける何物も ーを通して部屋をパッと明るくする稲妻に、アルゼンチン住い十三年間に集まってきて壁いっぱいになっている動物の面が浮びます。アルゼンチン しく大粒な雹が降る音に目覚めた夜中、「春になったのだから」とベランダに出しておいた鉢。ここから先が春になった証ですとばかりに、

ばかりです。高価な物はどうせ買えませんから、いつか大金持になった時にとあきらめて通ってしまふものがとても多いのです。 時は、財布の中のジャラジャラしているので充分まにあいました。今年になって、もう一つと思った時には百倍の値がついていて、あっけにとられる 私のガラクタは、誰か偉い人が価値を決めて高価になった物ではなく、私だけが勝手に決めただけの物です。木目が残る木の化石を買った

る周囲の生活、風景などが思われてくるような小動物に夢中です。 も、うれしさのあまりダンボール箱いっぱい買いました。今ではやめておこうという値になってしまいましたけれど、訥々と出来ていて、作ってい パラグヮイに近い地域、フォルモサのマタコ族が、パロ・サントという香りのある固い木で作る、その地に多い鰐や蜥蜴の動物達を見つけた時

い」というおぢさんに「欲しいな欲しいな」の一点張りでわけてもらい、その削り口より寒い石ころばかりの、だだっ広い地方での彼等の生活が思 南部パタゴニア地方を旅した時、昔住んだ大きな足をしたパタゴン族が、つりや狩りの為に、石を削って作った鏃を見つけ「これは売物ではな

うです。尻尾がない山羊を持っています。これは七才の女の子の作で「尻尾をつけるのを忘れてしまったの」という彼女の言葉が今でも耳に残っ 等それぞれの特長が把らえられていて愛らしいこと。同じ土でも、山羊の糞で焼くと真黒い焼物、牛の糞で焼くと黄茶色に出来上るのだそ て、私の居間におさまっています。 コルドバのミナ・クラベロとはアルゼンチンの丁度真中くらいの地域。低温で焼いた土の動物。埴輪以前の単純さで、それでいて野羊、リャマ、牛

なってしまったかということを、思い続けます。 ニカラグワの鼻が丸いマテの面、私が見つけてから二週間の後には、その面のあった位置は爆撃され、面を作った人、二カラグワの人達がどう

インド洋のセイシェル諸島にだけあるお尻の形をした双子椰子の実。

ながら紙も鉛筆も関係ないこれらの野生に近い物の中へ入っていって暮したい、などを思いながら私自身が作る、描く、まだあまりレベルの高 くない品々も増え続けているのです。 ·変な物が好きだね。」とおっしゃりながら近藤典生博士が下さいました。まだまだ限りがありませんが、子供達が独立したら、大き空を見

「三河アララギ」について

- ケイタイ ○九○-八四三四 八六四六TEL ○三 五九二四 二○六五東京都北区王子本町一 二六 六 Aシ三河アララギ発行所 〒一一四 ○○二二
- ◇編集・発行 今泉由利

♦ U R L

E-mail yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

http://imaizumiyuri.jp/

- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- 〜どなたも参加、投稿いただけます。

◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、

- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、